

松下幸之助記念志財団・教員フェローシップ
「柳川のニホンウナギ調査」プログラム報告書
2024 年 10/26（土）-27（日）

名古屋市立橋小学校
中嶋 秀美

1 調査での気付き

今回の調査を通じて、以下の気付きを得ることができた。

1 点目は、シラスウナギの採捕量は低水準であり、同時に減少基調であることである。絶滅危惧 1 B 種としてレッドリストに掲載されており、「近い将来、野生での絶滅の危険性が高い」とされている現状についても学ぶことができた。

2 点目は、ウナギが減ってしまった原因として、ウナギを獲り過ぎてしまったこと、生息地の環境悪化、地球規模の海洋環境の変化が挙げられることである。うなぎ養殖業者向け支援やウナギ資源の管理・保護対策を内容とする「ウナギ緊急対策」が定められ、日本全国で親ウナギを守る取り組みが行われていることを初めて知った。

3 点目は、レッドリストに指定されているウナギについて、授業の導入で扱うことで、「絶滅危惧種」や「環境保全」について児童たちの理解が深まるのではないかとということである。今回の体験を通して、児童たちに、人間の活動による生態系の破壊がある生物にとって個体数を減少させる要因につながっていることに気付かせ、生物が生きやすい環境を守るために自分たちにできることを考え、実行できるようにしたいと感じた。



▲稚ウナギにイラストマーを注入する作業



▲川の中の石倉カゴを引き上げる作業



▲石倉カゴの中にある生物を測定する作業

3 調査活動を生かした授業実践の概要

小学校 6 年生の児童に、まずは、今回参加させていただいたニホンウナギの保護活動について概要を話した。ニホンウナギは絶滅危惧種にされており、このまま何もしないと、ウナギを食べることができなくなるかもしれないことを児童に話すと、児童は意外そうな顔だった。というのも、児童にとってウナギは、給食や店（児童が住んでいる地域には、ウナギを扱った飲食店が多い）で、意識しなくても食べたり見たりすることができる身近な生き物だったため、絶滅危惧種に指定されているとは思わなかったようだ。このように、身近な生き物も、実は絶滅の危機に瀕していることを知るきっかけとなったようだった。この導入を基に道徳、総合及び外国語の授業で以下の内容を行った。

(1) 道徳における実践

① 内容

内容項目「D 自然愛護」において、「自然を大切に」を主題に「クジラとプラスチック」を教材に授業を行った。教材を通して、人間と自然の関わりに関心をもち、自然を大切にしようとするについて考えさせた。近年、海洋生物がプラスチックごみを餌と誤って食べてしまう問題を知り、自分たちの普段の行動が、環境に悪影響を与えたり、生き物の命を奪ってしまったりする可能性があることに気付かせ、「自然を大切にすること」についての価値理解を図った。



② 児童の反応（ノートの記事より）

- ・ 私が自然を守るためにできることは、ごみを分別したり、マイバッグを持ち歩いたり、4Rをすることだと思う。大人になったら、しっかりと税金を納め、国が環境のためにしている活動を支援できたらと思った。
- ・ 自然を守ることは、自分や他の動物を守ることだと分かった。
- ・ 好き嫌いをしないで食べて、食品ロスをなくしたい。
- ・ 化石燃料の消費を抑えて、プラスチックなどの使い捨てゴミの量を減らしたい。
- ・ 人間が自然を守ることができていないので、人間が努力して自然を守ろうとすることが大切。
- ・ 動物が住む場所がなくなると食べ物がなくなり、生きるのが難しくなる。その動物がいなくなると、人間も生活することが難しくなる。生態系が壊れるということは、人間も困ることになるということ。

③ 自評

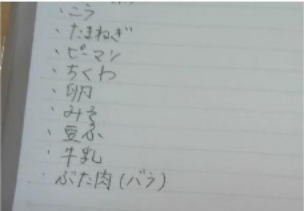
自分に実害がないと、環境問題について考えることは難しいと思ったが、児童たちからは、まるで自分の問題のように、海洋プラスチック問題を解決したいという意欲を感じることができた。扱った教材は海外の話だったが、私が参加したプログラムの話を通して、日本国内でも生態系が破壊されていて、その生態系を守る活動を行っている人たちがいることを伝え、児童は、「環境保全のために自分にできること」を考え、実行し、それを続けていく大切さを学ぶことができる授業になったと思う。

(2) 総合における実践

① 内容

道徳で考えた「環境保全のために自分にできること」を家庭で実践し、報告会を行った。

② 児童の反応

活動目標		アクションプラン	
美しさにしたことを、写真や絵で記録しよう。 発見したことや、気付いたことも書く。		必要なものだけ買ってごみを減らす	
12月5日(木)		写真のタイトル 必要なものだけ買う。	
		気付いたこと・発見したこと 買うものをメモに書いてから買い物に行ったら、必要のないものは買わなかった。メモに書かなかったときは、必要のないものを買ってしまった。使いきれずに腐らせてしまったことがあったと言っていた。これからは、メモを書いてからスーパーに行けるようにしたい。	
		場所 家	

活動目標		アクションプラン	
美しさにしたことを、写真や絵で記録しよう。 発見したことや、気付いたことも書く。		ごみを減らす	
12月2日(月)		写真のタイトル 家に飾るポスター	
		気付いたこと・発見したこと ポスターを書いて飾れば家族の人が、ごみをどのように減らせばいいかを楽しく考えられるからいいと思いました。買うものを減らせば食品ロスも減るし、ごみも減るからいいなと思いました。	
		場所 家の廊下	

- ・ 小さな積み重ねが、動物を守ることに繋がっていると思うと、やる気が出た。
- ・ 自分一人だけでは難しいと思った。家族の協力があると、より成果が感じられた。
- ・ 計画を立てた時は、意識して実践をすることができるけれど、これをずっと続けると思うと難しいと思った。

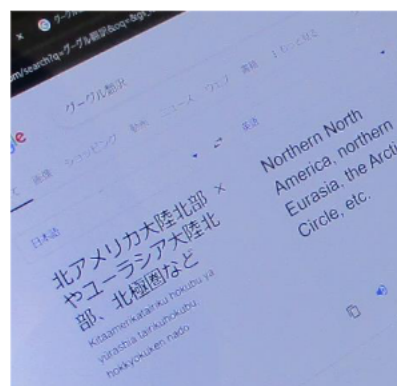
③ 自評

一か月間、「環境保全のために自分にできること」を実践した。言うは易く行ふは難しということわざの通り、たった一か月間だったが、「できること」を実践することは難しかったという声が多く聞こえた。今回のみんなの実践は環境の保全に役立ったことを称賛しつつ、これからも環境保全の活動を続ける意欲を児童にもたせることが教師の使命であると感じた。

(3) 外国語における実践

① 内容

「Save the animals.」の単元で、生き物が直面する問題と身近でできることをテーマに扱った。プラスチックごみを誤食してしまうウミガメや、森林伐採や狩猟が原因で危機に瀕しているトラについて、教科書の登場人物たちが話し合う場面を児童が見ることで、自身の日頃の行動を見つめ直すきっかけとした。児童が環境問題を自分ごととして捉えられるよう、日常生活のどのような行動が環境問題につながっているのか考えさせて、自然環境や絶滅危惧種を守るために日々できることの具体例を共有することができた。



② 児童の反応

学習を通して、動物園では見ることでできている動物も、実は絶滅の危機に瀕していることを知り、ショックを受けている児童が多かった。その原因のほとんどは、人間の生活から影響を受けていることが多いという事実も、児童にとっては衝撃的で、また、同じ人間としてなぜそのようなことをしてしまったのかと悔しい気持ちを感じさせる内容だったようだ。

③ 自評

児童の反応を見ると、学習を進めるにつれて、図鑑や動物園で見ていたので身近に感じていた動物たちが、実は希少なものが多く、「もしかしたら、今から守るのでは遅いのではないか」と感じている児童もいたのではないかと思う。しかし、「今残っている個体を守るために自分にできること」を児童はよく考え、実行しようとしている子が多く見られた。考えるのは誰でもできる、しかし、環境を守るために活動し、その活動を続けていくことは難しい。それを児童たちに感じさせることができた授業だったと思う。

4 終わりに

今回のプログラムを通して、「地球環境を守ろう！」と言うことは簡単だが、そのために自分ができることを考え、実行していくこと、その実行したことを続けていくことの難しさを私自身が感じたので、続けることの大切さを子供たちに伝えることができたと思う。

これからの主役である子供たちと、私たちの地球を守る必要性を考え、その答えを一緒に出していきたいと思った。誰かに任せるのではない、自然との共生だけでない、人間同士が手と手を取り合い、一つしかない地球を大切にしていかなければならない。